

“Nothing”の効用——

オスカー・ワイルド『理想の夫』一考察

村里 好俊

シェイクスピアの『リア王』*The Tragedy of King Lear*¹の冒頭近くに以下のセリフのやり取りがある。父王に対する愛情の深さを三人の娘たちに言葉で競わせようとして、リア王はそれぞれに自分に対する愛情を言葉で述べようように命令する。その愛情の深さに応じて、領地や財産を分配する魂胆なのだ。

Lear: Meantime we shall express our darker purpose.
Give me the map there. Know, that we have divided
In three our kingdom, and 'tis our fast intent
To shake all cares and business from our age,
Conferring them on younger strengths while we
Unburdened crawl toward death. Our son of Cornwall,
And you, our no less loving son Albany,

¹ 『リア王』からの引用は、Jay L. Halio ed., *The Tragedy of King Lear*: Cambridge University Press, 1992 に拠る。

We have this hour a constant will to publish
Our daughters' several dowers, that future strife
May be prevented now. The princes, France and Burgandy,
Great rivals in our youngest daughter's love,
Long in our court have made their amorous sojourn,
And here are to be answered. Tell me, my daughters
(Since now we will divest us both of rule,
Interest of territory, cares of state),
Which of you shall we say doth love us most,
That we our largest bounty may extend
Where nature doth with merit challenge? Gonerill,
Our eldest born, speak first. [I. 1. 31-49]

(リア王・その間に、今までは隠しておいた目論見を話そう。／その地図をくれ。この通り、王国はすでに三分してある。／自分の堅い決心としては、政治上面倒な気遣いを／ごまごましく老人の肩から振り払い、／年若くそして逞しい人たちに委ね／自分の重荷を降ろして死出の旅へと這い出すつもりだ。／コーンウォールの婿殿、そして同様に気に入ったオールバニーの婿殿、／今日わしは娘たちめいめいの嫁入り持参のものを発表する所存だ。／そうすれば、後日争いの生ずるのを防ぐことになるであろう。／フランス王並びにバーデンディ公は、末の娘の／愛情を競い求めて、わが宮廷に／求婚の長逗留をなされたが、／今日

はその返答があるはずになっておる。／さて娘たち、これから父は支配権も、領土所有権も、行政管理権もみな譲るのであるが、お前たちの中で誰が一番孝養を尽くす気か。／親の愛情を深く受け、子としての心がけが立派な者には、／分に応じて最大の譲り物をしたいものだ。／ゴネリルは長女だ、まず最初に言つてご覧。）

という問いかけに、長女のゴネリルがあることないこと、^{まこと}実しやかにおべんちゃらを申して、リアのご機嫌を取り、もらえる財産を豊かにしようとするが、その傍らで三女の純情な娘コーデイリアは、傍白で本心を正直に述べる。

Cordelia: [Aside] What shall Cordelia speak? Love, and be silent. [I. 1. 56]

(コーデイリア・「傍白」コーデイリアは何と言おう。孝行はするが、だまっていよう。)

この後、父王の要請に応えて、次女のリーガンも姉の美辞麗句に負けず劣らず、心にもない父への愛情の言葉を連ねて、父の歡心を買おうとするが、いよいよ自分の番になったコーデイリアは、父の

Lear: ……What can you say to draw

A third more opulent than you sisters? Speak. [I. 1. 80-81]
(姉たちよりもっと大きい三番目の領土を／我が物とするためにお前はと言えるか。話してご覧。)

という穏やかな問いかけに対して、

Cordelia: Nothing, my lord.

(なにもございません。父上。)

と思わず答えてしまう。一番信賴していた末娘の思いがけない答えに戸惑いを隠せないリアは

Lear: Nothing will come of nothing, speak again. [I. 1. 84]

(なにもないだど。何もなしのことからは何も出ることないぞ。／言い直しなさい。)

と催促するが、コーデイリアは次のように答える。

Cordelia: Unhappy that I am, I cannot heave

My heart into my mouth; I love your majesty

According to my bond, no more nor less. [I. 1. 85-87]

(不仕合せなことに、わたくしは真心を口先まで／持ち出すことができません。お仕えは致します。親子の絆に従

い、それ以上でも以下にでもなへ。

未娘の扱々はかばかしくもない返事に業を煮やしたリアのさらなる催
促に対して、以下のやり取りが続へ。

Cordelia: Good my lord,

You have begot me, bred me, loved me. I

Return those duties back as are right fit,

Obey you, love you, and most honour you.

Why have my sisters husbands, if they say

They love you all? Happily, when I shall wed,

That lord whose hand must take my plight shall carry

Half my love with him, half my carre and duty.

Sure, I shall never marry like my sisters.

Lear: But goes thy heart with this?

Cordelia: Ay, my good lord.

Lear: So young, and so untender?

Cordelia: So young, my lord, and true.

Lear: Let it be so, thy truth then be thy dower.

For by the sacred radiance of the sun,

The mysteries of Hecate and the night,

By all the operation of the orbs

From whom we do exist and cease to be,

Here I disclaim all my paternal care,

Propinquity and property of blood,

And as a stranger to my heart and me

Hold thee from this forever. The barbarous Scythian,

Or he that makes his generation messes

To gorge his appetite, shall to my bosom

Be as well neighboured, pitied, and relieved,

As thou my sometime daughter. [I. 1.90-113]

(コーデイリア・お父様、／生みもし、育てもし、可愛がつてもいいただきました。／お礼として孝行は当然果たします。

／従順で、孝行で、最も敬愛いたします。／お姉様たちは、何はさておきご孝行なさると／仰るならば、なぜ夫のある身となられたのでしょうか。／たぶん、わたくしも結婚すれば、契りを結ぶ／その主人が私の愛情も、心遣いも／義務をも、半分は持つて行かれることになるでしょう。／お姉様たちのような結婚は私決して致しません。／誰を差し置いてもお父様にお仕え申すはずならば。

リア・だが、お前の心はその言葉通りか。

コーデイリア・左様でございます。

リア・そんなに若いのに、そんなに頑固か。

コーデイリア・こんなに若いので、本当のことを申します。

ノア・勝手にするがよい。お前の本当とかを持参金にせい。

／日の神の神々しい御威光に誓い／黄泉の女神の闇夜の密

儀に誓い、我々に生を授けまた奪う、諸々の天体のあらゆる作用に誓って、親たる心遣いも、血縁の続きや、繋がりも、ここに一切断絶を宣言し、かつ今から未来永劫余の身にも心にも、お前を赤の他人と思うぞ。シリアの野蛮人や、食欲を満たすためには肉親を、食い物にする奴を、も、今までは娘であつたお前に比べれば、心に適う隣人ともなし、気の毒にも思い、そして助けてもやることになるだろう。

この後、忠臣ケント伯の取り成しにも全く耳を貸さず、リアはコーデイリアに対してこそ最も豊かな遺産を与えたいという自らの希望を裏切られて怒り、心頭に発し、彼女を勘当同然としてフランス王に嫁がせる。周知のとおり、リアはこの後二人の娘たちに惨い扱いを受け、自らのアイデンティティを喪失して「リアの影法師」(一、四、一九〇)とフリーに皮肉られるようにまでなり、王としての権威は地に落ちる。この劇で、リアのセリフ“Nothing will come of nothing”は、劇のテーマとして非常に重い言葉であると思われる。「只の屑、全く役に立たないもの、無、ゼロ」という意味の“nothing”が実はあらゆる有用なものを産み出す原石という意味になるからだ。リアは「愛を表す言葉が何もないならば、何ももらえないぞ」という脅しの言葉を言うのだが、しかし、この劇は、まさに Nothing であ

るコーデイリアが有用なものを生み出す原石として作用する筋立てなのだ。コーデイリアと並んで nothing 的な存在なのが、宮廷道化の Fool であるが、この Fool はいわゆる「ワイズ・フール」としての機能を果たし、追放同然の落ちぶれ果てたリアに常に付き添い、きつい言葉をリアに突き付けたりもするが、コーデイリアと同様に真実を述べる正直者である。この劇には、「時の老人が真実の娘を救い出す」という寓意が見られるとされ²、リアは劇の最後になつてやつと、地位とか財産とかではなく、物事の本当の真実をコーデイリアとフールとのお蔭で理解できるようになる。“nothing”からは何も生まれないのではなく、“nothing”からこそこの上なく有用なものが生まれるのである。

これと同様なことが、オズカー・ワイルド作 *An Ideal Husband* の映画版スクリプト³にも当てはまるのではないか。

理想のカップルとして世間の喝采を浴びているチルターン夫妻 [Lady Gertrude Chiltern, Sir Robert Chiltern] は、今やわが世の春を謳歌しているが、夫妻の屋敷で開かれたパーティーに邪魔者が突然現れる。チヴァリー夫人だ。彼女

² 岩崎宗治『シェイクスピアのイコノロジー』三省堂、一九九四年、一八〇-一頁参照。

³ 映画版スクリプトからの引用はすべて、Oliver Parker, *An Ideal Husband based on the play by Oscar Wilde annotated by Akira Tamai and Tomoko Okita*, Eihosha, 2001 に拠る。

はガートルードと昔同じ学校に通っていたが、ある不正を犯した廉で追放された人だ。その後色色と危ない橋を渡つて、現在の裕福な地位を手に入れたが、陰のある女性であるようだ。ロバートが昔駆け出しの政治家として、大臣の秘書を務めていた頃、国家の機密文書を盗み出し、それを当時尊敬していたアーンハイム男爵に譲渡し、大もうけした男爵から大金を贈られ、それを基にして、現在の花形の政治家の地位に上つたとして、当時彼が書いた手紙をダシに彼女にゆすられるようになる。この危機的瞬間に現れて、大活躍するのが夫妻の友人で、代々の由緒ある家柄の御曹司 Lord Arthur Goring である。いかにも家柄の良い貴族のように、彼は世間を超越し、実用的功利的な意味では、ぐうだらな生活を送り、父の催促にもかかわらず、三十歳台半ばなのに結婚もしていない。父カヴァンシャム卿にとつては、自慢の息子どころか、ロバートの爪の垢でも煎じて飲ませたい体たらくの息子だ。ところがこの手紙事件でアーサーが八面六臂の活躍をすることになるのだ。アーサーは昔若いころ、若気の至りで、チヴァリー夫人と婚約していたことがあった。それを口実に彼は彼女に近づぐ。チヴァリー夫人にも何か魂胆があり、アーサーに接近する

ト この映画では、アカデミー主演女優賞を受賞したことのある名女優ジュリアン・ムーア [Julianne Moore] が演じているが、絶賛もこの非常に陰影に富んだ役柄を作っている。

のだが、例の手紙をめぐる二人の間に複雑精妙な駆け引きが続く。

さて、ワイルドの劇作品とそれを基に書かれた映画版のスク립トには細かい点は色色と違いがあるが、大きな点では少なくとも二箇所の違いに着目すべきである。一つは、ロバートが議会でする大切な演説の言葉が劇作品には書かれていないが、映画版スク립トには、そのレトリカルな演説がすべて書かれていることだ。

また、次の映画の最後近く、目出度くメイベルとアーサーとの結婚式が終わった直後の、次のセリフの遣り取りは注目に値する。すべてがハッピーエンドで締め括られる場面だ。

At the front of the congregation, Robert sits with Gertrude.

Gertrude: (whispering) Gertrude……

Robert: Yes, my love?

Gertrude: Oh … nothing.

Arthur and Mabel stand at the altar, with Lord Caversham.

Caversham: And if you don't make this young lady an ideal husband, I'll cut you off with a shilling.

Mabel: An Ideal husband! Oh, I don't think I should like that.

It sounds like something in the next world.

Caversham: What do you want him to be than dear?

Mabel: He can be what he chooses. All I want is to be
...to be...oh! A real wife to him.

Caversham: Upon my word, there is a good deal of common
sense in that, Lady Goring. You don't deserve her, sir.

Arthur: My dear father, if we men married the women we
deserved, we should have a very bad time of it.

Caversham: You are heartless, sir, quite heartless.

Arthur: Oh, I hope not, father.

*Father and son try not to smile. Their eyes betray them. The
extremely newly-weds kiss.*

Robert sees that Gertrude still looks preoccupied

Robert: What is it, my love?

Gertrude: Well, I was just wondering... Is there in your past
anything else you...no, no, no. No, I think I've had quite enough of
the truth for one Season.

They smile. They kiss.

(集会の前面にロバートがガートルードと一緒に座つて
さね。)

ロバート(ささやき声で)・ガートルード・・・
ガートルード・なにかしら、あなた。

ロバート・例の手紙だよ、君がアーサー宛てに書いた
手紙さ「あなたが必要なの。あなたの許へ参ります。」
本当に、アーサーが必要かい。

ガートルード・ある意味ではね、あなた。

結婚の儀式が続く。

ガートルード・ロバート・・・

ロバート・何だい、愛しい人？

ガートルード・あら、何でもないわ。

アーサーとメイベルはカヴィシヤム卿と共に祭壇のそば
に立つ。

カヴァシヤム・もしお前がこの若いご婦人のために理
想の夫にならなければ、びた一文やらないでお前を勘
当するぞ。

メイベル・理想の夫ですって。そんなのまっぴらだわ。
あの世での出来事みたいに聞こえるわ。

カヴァシヤム・じゃ、何になってほしいのかな。

メイベル・何であれ、好きなものに。私が望むのは、
えっと、えっと・・・おう！ 彼にとって現実の妻よ。

カヴィシヤム・なるほど、それには常識がいっぱい詰
まっておるわい。お前はこのご婦人には似合わないぞ。
おい、こら。

アーサー・お言葉ですが、父上、私たち男がお似合
いの女性と結婚した日には、男にとって最悪の日々を
送ることになるでしょうよ。

カヴィシヤム・心がけの悪い奴じゃ、全く情けない。
アーサー・そうでないことを祈るのみです。父上。

父と息子は笑みを零さないように懸命だ。しかし彼らの眼が二人の努力を裏切る。結婚したての熱烈なキスだ。ロバートはガートルードが物思いに耽っているのに気づく。

ロバート・どうしたんだい、愛しい人。

ガートルード・ちょっと考え事をしていたの。あなたの過去に何かしらあなたが白状したこと以外にあったら・・・

いえ、いえ、いいの。社交界の一季節にしては充分過ぎるくらいの真実を知ってしまったと思うから。

二人は微笑んでキスをする。

この場面で重要なセリフは、ガートルードの「あら、何でもないわ」である。彼女は考え事をしていて、色々ごたごたしたけれど、すべてが丸く収まった今、その経緯を考えているはずで、丸く収めてくれたのは結局アーサーであつたと思ひ巡らしているはずだ。この“nothing”ということばは、アーサーその人を指していると考えられる。アーサーは先祖代々由緒正しい貴族の御曹司で、まさしく貴族的な生活を優雅に送り、世間の俗悪に染まらず、自由気ままに生きていて、世間の常識に全く当てはまらない人物である。実用的功利的な観点からは「無、無用の長物、ゼロ」に等しいが、数字に零が付くと無限の数へと増えていくように、控えめながら、この手紙事件では大活躍をし、

表立つては何事もなかったかのごとく、すべてを丸く収める張本人である。まさしく“nothing”であることの効用と言える。リアの言葉をもじれば、「nothingからは何も生まれぬ」のではなく、「nothingからこそすべてが生まれる」のである。“Nothing”は、あたかも錬金術師の“philosopher's stone”のごとく、最も大切なモノを生み出す「生命の石」に等しい。

かくのごとく、慌ただしい効率的な世の中は、役に立つもの、すぐに実用化できるものを重宝がるが、目に見えてすぐに役には立たないが長い目で見れば、必ずや何らかの重要な実益を上げるもので、“nothing”に匹敵するものこそ、本当の意味で、世界・社会・人類にとって有用なのではないか。アーサーの結婚相手のメイベルも、彼と似た者同士で、義父のカヴァンシャム卿の「理想の夫」という言葉に過敏に反応し、「理想の夫」とは、架空の存在であり、現実世界には存在しないと言い、自分は夫にとって「現実の妻」になると断言する。架空の世界にしか存在し得ない「理想の夫」あるいは「理想の妻」ではなく、現実の世界こそ素直に向き合うべきものと考えているのだ。それがこの映画のシナリオの言いたいことではないか。

